

# 〔翻刻〕青果日記（昭和三年・昭和四年）——眞山青果文庫調査余録（二）——

青木稔弥・青田寿美・内田宗一・高野純子・寺田詩麻

\*キーワード

眞山青果文庫・青果旧蔵書・青果日記・星槎ラポラトリー・西鶴研究・沢田正二郎

はじめに

前稿「眞山青果文庫調査余録」（『調査研究報告』41号）では、星槎ラポラトリーに蔵する膨大な「直筆原稿、稿本、研究ノート、メモ類、日記、書簡等の肉筆資料」の貴重さと、その整理を継続する必要があると述べ、比較的多数の書簡を紹介した。本稿以降、その続篇として、日記を紹介する。作家その人を知る資料として第一に参照すべきは日記、第二には書簡であると言えようが、眞山青果全集に日記、書簡の巻はないのである。星槎ラポラトリーでは、今のところ、明治四十二年から昭和十五年にかけての日記が確認できる。ただ、その多くは断片的で、研究メモの類に埋もれている感がある。例えば、昭和十四年は十二月十日と十二日、昭和十五年は元旦から七日の分しか見あたらない。日記を毎日書く習慣

がなく、散発的にしか書いていないからで、その中で例外的にまとまったものとしてあるのが「昭和四年・五年日記」「函架番号081」である。

研究メモの類が過半を占めるのは他と同様なので、とりあえず、残存する日記部分の全てを抽出する作業から始めることにした。

本稿で紹介するのは、その前半、昭和三年十二月二十八日から昭和四年末（十二月には、もともと二十日付の分しか記載がない）までである。

昭和四年三月八日の後に22ページ、九月八日の後に6ページ分の欠落があり、紛失もしくは廃毀された箇所がある可能性はあるものの、青果の日記記載は、おおむね一日1ページで、大きな欠損はないであろう。

なお、昭和三年の十二月から昭和四年の日記が始まるのは、師走になって新しい年から日記を、との発想に至ったからで、「明治四十三年 当用日記 博文館発行」に「この日記は四十二年十二月十二日より初」まり「四十二年の分はこの日記の十二月のトコにあり」とする先例がある。

## 凡例

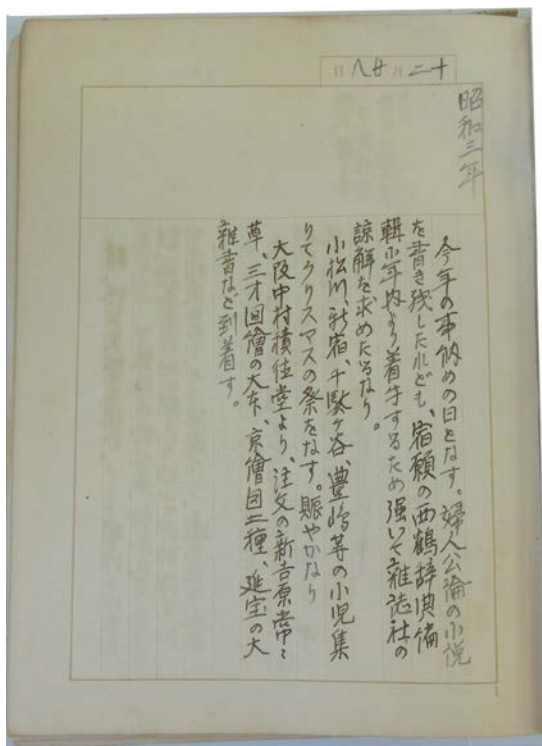
- ・漢字は、原則として通行の字体に改めた。
- ・変体仮名や合字などは、通行の仮名字体に改めた。
- ・仮名遣いは、原則として底本の表記に従う。
- ・明らかに濁点を必要とする場合は補った。
- ・明らかな脱字は、適切な語句を本文行で「」の中に補った。
- ・明らかな誤記は、ルビ行に（ママ）と傍記した。ただし、日付の誤りは訂正した。
- ・底本の振り仮名は、そのまま翻刻した。
- ・字下げや句読点は底本ママとし、翻刻者が補わないこととする。
- ・底本に加筆や修正が施されている場合は、それを反映した。
- ・判読不能の箇所は、□□で示した。
- ・日記以外の要素（研究メモ等）を日付の記載なく記している場合は、翻刻の対象外とした。同様の挟み物類も除外した。
- ・本稿巻末に人名索引を附した。

## 〔附記〕

本稿は、星槎グループ「眞山青果蔵書研究助成事業」による研究成果の一部である。また、画像の撮影ならびに掲載について、星槎ラボラトリーより御高配を賜った。記して感謝申し上げます。



「昭和四年・五年日記」表紙



日記本文



翻刻

昭和三年

十二月廿八日

今年的事納めの日となす。婦人公論の小説を書き残したれども、宿願の西鶴辞典編輯に年内より着手するため強いて雑誌社の諒解を求めたるなり。

小松川、新宿、千駄ヶ谷、豊島等の小児集りてクリスマスの祭をなす。賑やかなり

大阪中村積徳堂より、注文の新吉原常々草、三才図絵の大本、京絵図二種、延宝の大雑書など到着す。

十二月二十九日

晴。終日失墜を読む。ノート製作には未だ着手せず。午後福井野紅君、鈴木氏亨君来訪。鈴木君は山口剛氏を訪ふて西鶴研究助手の相談をなし、その帰途なり。適当なる人ありと云ふ。

夕方鷺尾君来訪。脚本の周旋を頼まる。

佐藤鶴吉君（元禄文学辞典著者来訪。西鶴につき二時間ほど話す。初対面なり。中央公論に同辞典の批評を書きたるため、その礼に來りしなり。菓子折など送らる

「頭書」課定。常々草 第二回精査 吉原失墜 参考。

十二月三十日

晴。あたゝかし。

吉原失墜を読むうち日次紀事を検する必要ありて同書を出し、今度はそれに引掛りて終日読耽る。

尾崎久弥君に常々草、永見君に諸艶大鑑、借用書を返送す。紅屋羊羹一箱づゝ送る。

午後孚水書房の主人新吉原常々草の原刻本を持ち来る。よく、同書に縁のあることおかしく高価なれども買入れを約す。金七百円といふ。来春支払の約束にて内金百円渡す。

指方君浄書のカードを持来る。筆耕料四十円ほどなり。夜、黒川一君歳暮の礼に來る。余に食品二種、小児等へは菓子類。

家族全部をつれて大木戸ふくべにおでんを食ひに行く。和田君留守番。

十二月卅一日

曇。寒し。

午前二時半目覚む。そのまゝ、五時頃起床。

昨日買入の常々草を見れば宝曆の再摺本なり。奥附も検査せざりし軽率さ、われながら恥かし。われには全く不用の本なり。和田君を勞して孚水画房に交渉せしむ。先方も恐縮して快く破談を承諾せし由なり。終日読書。払残りの書出し來りて煩さし。二十不孝など読む

午後三時頃孚水画房來り新小夜嵐を見せる。さまで入用ならねど昨日のことあり買入れる。三百円と云ふを一割引かしむ。

新国劇俵藤君來る。金もち來る。

夜年越の膳に向ふ。指方君遅く来る。鈴木氏亨君歳暮の礼に来らる。

一月一日

晴れて静かなる元旦

零一五時半に起きて宮城前の拜賀にゆく。彼の帰宅をまちて雑煮の膳に座る。

西鶴を読む。ふと思ひ立ちて夕方より西鶴著書出版者研究を初む。彼の江戸居住いよゝゝ明かになる心地す。近来の収獲なり。

夜小児等を相手に重詰にて飲む。

〔頭書〕西鶴著書発刊者調査

一月二日

晴。風ありて寒し。

四時目覚む。西鶴論の腹案など定む。

八時頃、一浴し来りて昨日の研究をつゞく。

和田君来賀。高橋先生、指方君来賀。

午後三時頃、松本賛吉君年賀に来る。出て応接するうち、伊藤茂雄君来賀。

一酌。

夜八時ごろ臥床。

この日朝伊藤茂雄君に投書。西鶴論中央公論二月号に掲載したきためなり。

一月三日

晴寒し。

四時頃目覚む。読書。

午前婦人公論を書出さんとして能はず。西鶴出版書肆のカード整理などにつとむ。

午後も同じ。梅本某氏来る。

一月四日

晴寒し

この朝せつ子咳嗽しきりなり。家内騒動

婦人公論の小説書かんとして机に向ひたれど、西鶴論（西鶴の江戸浅草住居）が気にかゝりて書けず。雑書考察にひまどる。真実伊勢など読む。

西鶴著書出版年表を浄書せしむ。和田君の仕事はじめなり。夜、零一みほ子和田君をつれてオザワに晩食す。

一月五日

晴。寒気やゝゆるむ。

うかゝとして正月も五日となる。

終日読書。江戸居住時代の西鶴について腹案など定む。名古屋尾崎久弥君より来書。甚しき窮迫を訴へ来る。同情に耐えず、一策を申送る。且つ西鶴肖像（延宝六年、武家らしき姿の由）について頼状を出す。

一月六日

寒けれど晴れて、風はげし。

終日婦人公論のために机に向ふ。正午頃小栗儀造君上京の電話あり。夜

間面会を約す。高橋菊三郎先生令室来訪。

夜、八時迄待ちたれど小栗氏来らず。遠慮して帰名せるか。

一月七日

晴。

足部に湯たんぽ二つ入れて婦人公論を書く。

とかく西鶴に心奪はれて仕事すゝまず。

零一の学友等遊びに来る。

「頭書」図法師。看技の類か。師宣の絵本伽羅やの条に出づ。

一月八日

晴

勉強して婦人公論のために書く。苦しまぎれの間に合せなり。午後も書

いて五時半頃終る。

山口剛君へ初めて書状を出す。みほ子お婆さんと鈴木氏亨君へ年始にゆ

く。

やなぎ榊研究、歌謡集成、史苑、東北印刷（刈田郡誌）集古等へこの年

の会費納付。

午前沢田正二郎君来る。三月狂言の頼みなり。

（後按、この前日なるべし）

一月九日

晴。日中はあたゝかし。

朝より「井原西鶴の江戸居住時代」を書き初む。鼻風うるさく稿すゝまず。

ちよを使用して水守君母堂の病氣見舞にやる。丁寧なる礼状来る。

午後山口剛君の紹介状をもち綿谷雪君来訪。西鶴研究助手志望なり。話

して見るに適任らし。即ち一代男の語彙集成を托す

一月十日

晴

終日、西鶴の江戸居住時代を書く。頭痛を覚ゆ。午後和田君を使用して原

稿出来たゞけ二十枚、中央公論社に送る。塩釜佐藤に山本より海苔を送

らしむ。

一月十一日

晴

頭痛はげし。西鶴論稿をやすむ。中央公論島中氏に書を送りて、同文は

三月号に延期す。

夕刻、鈴木氏亨氏来訪。畠中蓼波君を招きて四谷ふくべにて晩食す。泥

酔して後のこと知らず。慚愧々々。午前三時半帰宅。

一月十二日

晴

午後一時半起床。小児等にもわらはる。

午後三時綿谷君来る。西鶴語彙打合せのため也

今夜、千駄ヶ谷、小松川の小児等集りて遊ぶ。酒少し過ぐ。小児等とまる。

一月十三日

晴

一昨夜の泥酔慚愧甚し諸方にわび状を出す

終日読書

午後白石慶三氏夫人来訪。

一月十四日

読書

一月十五日

晴

午前読書。

午後一時より星岡茶寮にゆく。予てより約束にて桜井忠温君と面会。乃木將軍の話聞く。

帰途ふと思ひつき水守君訪問。江戸源へ行きて飲む。しのゝめに寄る。和田君来る。

一月十六日

晴

午前読書。

午後岡本靈華夫人来訪。今後の生活問題につき相談をうく。

今日午後三時山口剛氏訪問の筈なりしが、綿谷君来りて十八日に延期。

夜、浅倉寅雄君来る。例の伊達安芸銅像の相談なり。

一月十七日

晴

暁三時頃六畳に大鼠入りたりとて家内みな起出づる。そのため晏起、七時起床。

午前西鶴論を書く。正午頃野呂瀬君来訪。岡本遺族問題につき佐藤紅緑氏との仲介者として来りしなり。

午後論文を書く。

一月十八日

晴 後曇る

午前読書

午後三時半山口剛氏訪問。初対面なり。寛談午後九時過ぎに及ぶ。酒食をもてなさる。生徒の話はさすがによし。

一月十九日

晴

読書。鈴木敏也氏の五人女評注(マユ)を読む。あまりノンキなる読方なり。この人に西鶴は無理なり。  
午後黒川一君来訪。

一月廿日

晴。

午前西鶴の江戸居住を訂正浄書す。一浴。

日曜なれど和田君来る。叱りて仕事を与へず。浅倉君のたのみにて午後四時ふくべにて額田六福君と会食す。かなり酔ふ。菱木へ立寄る。

一月廿一日

晴、曇る。

宿酔の気味。午前読書。

一月廿二日

晴

読書

一月廿三日

一月廿四日

一月廿五日

晴

好色一代女を購ふ。村口書店、金一千七百五十円、山口剛君の世話なり。鈴木君島井君来る。小判十一両をラヂオ放送すためなり。已を得ず承諾す

一月廿六日

晴

読書

午後指方君来る。俵藤君来る。

綿谷君来る。山口君より西鶴全集俳諧篇を送らる。

一月廿七日

晴

三月三日

空晴れて風つよし。

富士山見ゆ。沢田君絶望と云ふ。旧稿訂正。午後三時カキガラ町安井病院を見舞ふ。牧野良三君、中村吉蔵君、仲木貞一君その他数名あり。菊池寛君も来る。絶望なり。新聞記者に包囲せられ談話謝絶の方法に苦しむ。九時頃帰宅。国木田のミドリさん、とみをなど居る。一酔して眠る。

○松山衣山二神文六といふ人より田舎製の麦みそ。



三月四日

晏起。八時。空晴る。名古屋尾崎君に電報、出京延期せしむ。

沢田遂に起たざる由。午後一時〇二分永眠。

三時頃安井病院にゆく。夕刻家に帰る。

新宿の妹来る。この夜遅く吉野作造君来訪の電話あり。晩酌しつゝ、待つ。

来らず。大酔。とみをひで九時過ぎ帰り去る

会津伊藤伸子といふ人より九重、乾きくらげ送り来る。

三月五日

曇天。宿酔。

吉野君昨夜十時頃来りしも門鎖しありしといふ。ちよ女の失錯なるべし。

仙台ちよおばよりサツマ揚。翁久允君より越中名産の鱮ハツク送り来る。

三月六日

晴。やゝ寒し。

午前午後婦人公論のために書く。昼過指方君来る。沢田君についての記事を求むる也。よき程に答へ置く。

今日あたりの新聞を見れば沢田もやうやく英雄らしくなれり。苦々しき事なり。人は皆かれが人気の以外に立たんとして心ひそかに苦悶しゐたことは知らぬと見ゆ

三月七日

晴。寒し。

午前講談クラブのため旧稿など訂正

午後帝国劇場宇野四郎君来訪。幸四郎かん弥のために乃木將軍の上演を乞はる。沢田のために書きたるものなれば謝絶す。

齒のためか右の頬はれ上り頭痛を覚ゆ

香奠を持たせて和田君を沢田君の通夜にやる。

○おのぶより鱈の塩辛。

三月八日

晴。寒し。

頬はれて気分悪し。こたつに入りて風俗講監マモなど繙読す。今日は日比谷に沢田の芸術葬とか云ふものあり。勿論参列せず。彼をいたみ悲しむ者の行くところにあらず。

七月二十八日

○今日も暑し。老母、零一、みほ子、本牧へとて朝早く家を出づ。この夏潮浴する貸家を探がすためなり。

○歌舞伎座八月狂言「唐人お吉」など少しく校訂する。そこゝ、にして松竹の使に渡す。

○日本海軍史料叢書を読む。午後は晴翁漫筆。

○子供等本牧より帰る。やうやくにして六畳三畳二畳の小家を見付けたりと云ふ。この夏は避暑者多く、他には貸家なしと云ふ。当人等さへ間

に合はゞそれにて謫むべし。

○二十九日

○午前二時半頃、微震ありて目覚む。それより睡眠をなさず、四時頃雨戸を繰る。

○今朝の報知新聞に麹町区三年町居住能惠留氏脚色の「唐人お吉」といふものを来月の歌舞伎座に上演し、自分が演出をなす由の報道あり。何の間違にや。或は例の宣伝か。若しそれが事実にて、わが作品の上演中止とならばわが為めには寧ろ悦ぶべし。

○午前一鳳軒の綺語文艸を読む。

○午後俵藤君来る。新国劇の将来問題についての頼みなり。沢田君なき後の俵藤君の苦勞察すべし。沢田生存時代には顧問の相談役のとして、小遣錢をもらつて彼の親友顔せる文壇の何がしくれがし、今果して何の顔色がある。

黒川君来る。時間の都合あるにつき、脚本をもう少し省略したしと社長  
の伝言なり。不快極りなければ答へず。又かねて申込み置ける前借承諾  
のよしなれど、借入を謝絶す

○遠雷おどろ、しく、炎熱如燬。

○三十日

○よく眠る。八時頃起出づ。会津の伊藤君（大庭恭平事蹟調査謝礼）竹  
柴鷹二君（血笑記台本浄書）等に送金する。

○午前、近代歌謡集を読む。今日も暑し。正午頃九十度に近し。

○昼飯はオザワのライスカレイ。今朝小児等泉水の掃除したる褒美なり。

○午後歌謡集読む。

三十一日

○暑気甚だし。この朝老母小児等を連れて本牧へ行く

○午前午後読書

○京都大学塩沢亮君（大学院）来訪。西鶴研究の話など聞く。夕刻松本  
賛吉君来ル。四谷ふくべにて晚餐。帰途久しぶり江戸源に立寄る

仙台おちうおばよりホヤ到着。京都頼原君より京扇。伊豆下田村松  
翁よりその著「下田に於ける吉田松陰」寄贈せらる。

○八月朔日

○朝のうち曇る。苦熱酷烈。

○午前思出草紙読了。今朝米沢よりおやそ伯母出京の電話あり。小児等  
不在のため家内整頓して広々としたるやうなれど、流石に物寂し。

○午後読書。塩沢君持参の京都虎屋の羊羹など切らす。

○米沢みやげの山ヒジキとか云ふ蔓草のひたしもの。仙台のホヤ。  
共に麦酒によろし。

○午後黒川君より電話。大谷氏頃日來のことを心配して、今日来訪の筈  
なりしが晚酌の頃なればとて中止したりと云ふ

○二日

朝より暑し。

午前読書。五畿内志 泉州志等。兄や姉不在なるため、せつ子一人さびしさうなり。

午後婦人倶楽部小林君来る。戯曲濁り江を掲載するについての相談なり。午後読書。午前と同じ。

三日

○暑気酷烈。人みな喘ぐ。たゞ少し今日は風あり。

○午前、手紙二三通書く。俵藤君より電話。牧野良三君に面会のため銀座茶寮まで来られたしとなり。それ迄もなし牧野氏自宅を訪問すべしと答ふ。

○午後二時、駿河台に俵藤君と共に牧野君訪問。会談二時間ほど。新国劇のために菊池寛君牧野君と三人同行して大谷社長に依頼すること、定む。帰途楠林書店を訪ふ。少しく頼む用件ありてなり。イツモながら面白からぬ面付の男なり。

○四時頃帰宅、竹早町小学校の前にて鈴木氏亨君に逢ふ。不在のため帰るところなり。いろゝ、話す。

○黒川一君来る。歌舞伎座の稽古場より台本の事にて来りしなり。鈴木君と三人にて家を出て、有楽町花の茶屋にて晩飯。黒川君、一度歌舞伎座に行きしが用事ありとて又来らず。

○帰途峰田君の家(竹の家)に寄りて涼む。

○楠林の用事ことはり来る。鈴木君よりメロン二箱送らる

四日

今日も暑し。午前読書。遠碧軒筆記(ついで)を精読す。

午後も同じ。今日歌舞伎座の初日なり。不参。

○五日。

暑し。午前、不快ながら歌舞伎座脚本第三幕結末の修正を書く。

○正午頃黒川君原稿をとりに来る。同君のわれに対する信頼、近來ますますその度を越ゆるやう思はれて心苦し。

○午後三時過ぎ、ふと思立ちて本牧へ小児等を見にゆく。みな健康なり。近所の小料理屋にうなぎなど命じて晩食を共にす。

暑苦しく寝ぐるし。

○六日

○暑し。昨夜寝不足のため頭重く、午前九時東京に帰る。家に帰れば豊島の正治さん暑中見舞に來りゐる。

○松竹より電話。明日午後六時より社長晩餐を共にしたしと云ふ。此頃中のことにて心配してゐるなり。いつまでもすねてゐるやうで悪いから、快く応諾す。

○粟屋愛亮君死亡の通知あり。彼も遂に晩年をあやまりて、考へれば気の毒なる男よ。小学校時代の友人又一人へる。小森の新次君来る。

○七日

○あつし。午前読書。

○今日大谷社長となかなかほり。中州松本といふ家にて飲む。帰途明治座へまはる。

○若い役者どもにそゝのかされて、芳町松葉に行きて飲む。花柳、藤井、松本、英、伊志井、柳など来る。  
家に帰りしは午前二時なりと云。

○八日

暑し。この日午後九十七度といふ。

宿酔の気味。午前読書。

午後歌舞伎座にゆく。三場ほど見る。脚色の拙劣われながら冷汗背にあまねし。

竹葉にて小酌、九時頃帰宅

○九日

○酷暑。この朝京都横沢某君より西鶴置土産を送り来りて批評を求めらる。かなり精細を期したるやうなれど至らざるもの多し。文字によりて西鶴を読む弊なり

○午後二時、松竹事務所訪問。社長と会議す。歌舞伎座九月の相談なり  
四時頃帰宅

夜井上宗助君暑中見舞に来る。遠雷、微雨

○十日

○淇園先師、毎謂<sub>二</sub>読書<sub>一</sub>曰、読<sub>二</sub>了<sub>一</sub>数紙<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>日知<sub>一</sub>得数字<sub>一</sub>、此似<sub>二</sub>迂回<sub>一</sub>還甚便捷(田中大蔵、学資談)われの西鶴に於ける常にこの恨事あり。

○暑し。家のなかさびしければ、本牧の小児等を二三日帰宅せしめんと、速達便を出さんとすると零一より電話あり。その旨を通す

○大谷氏より電話。唐人お吉続演を俳優に発表のこと。又曰云々。

○おいね亡母三回忌今日浅草の旦那寺にて営むといふ

○小児等本牧より帰る。晩飯には寿しなどとする。

○十一日

暑熱依然。午前読書

午後三時頃大谷氏来訪。今日日曜にて事務所に入なきゆる遊びに来りしと云ふ。井上正夫と築地小劇場の合併芝居などの相談あり。

午後読書。

○十二日

○昨夜寝苦しく、そのため晏起。暑し。

○いね、小児等をつれて本牧にゆく。今日より又執筆の予定なり。

○下田、村松先生来訪。芝居見物のためなり。記念として古瓢一瓢送らる。  
松竹に電話してそれ々の準備をたのむ。

○午後四時過より迅雷豪雨来る。一過すれば清涼水の如し。この日処々

に水害ありと云ふ。

○十三日

爽涼。秋気頓に動く。午前唐人お吉など考案す。

午後和田君を松竹にやる。金子借入のためなり。それより直に歌舞伎にまはらせ村松翁接待のことを托す。

三時過ぎ驟雨来る。夜は雷鳴を頭上に聞く。

○十四日

空晴れて暑し。午前脚本考案。思はしからず。仙台の諸寺に宇蘭盆の為替を送る。

早朝村松翁より電話。下田に不幸ありて急遽帰村すると云ふ。訝かし。芝居を見て気色にても損じたるか。

○十五日

○十六日

○朝より風雨はげし。大気湿潤にして不快。仕事出来ず。雑書乱読。

○午後俵藤君来訪。憔悴して甚だ気力なし。同情に堪へず。一座の俳優等も共に苦しむと雖も、俵藤君の苦心には及ぶ筈なし。何とかして一座を維持させたきものなれども……。

○十七日

○暑気またぶり返す。朝より机に座りたれど仕事思ふやう進行せず。

○今朝、上州中島老母に小使(マユ)を送らせる

○十八日

○暑し。脚本を書く。進行遅々。

○藤井昇子来る。(夜)

○十九日

○暑けれども少し風あり。午前大坂松竹の日比君来訪。寿三郎一座の戯曲の用事なり。

○独乙飛行船来る。

○本牧の小児等きげんよろしき由なり

○二十日

○二十一日

○二十二日

○二十三日

○二十四日

○唐人お吉改訂篇書終る。夜蒲田に井上正夫君訪問。新橋浜作にて会食。

○この日か前日か、小児等本牧より帰る。

○二十五日

○午後三時、事務所に大谷氏訪問。九月下旬歌舞伎座興行の井上正夫君一座の相談。

○二十六日

○江藤南白を読む。

○この夜禁酒。

○二十七日

○事多くして十三日来記事を忘る。暑けれど秋色すでに十分なり。

○井上君のために江藤新平を読む。吉野作造君に使を出して関係書類借入ル。

○黒川一君、本郷座鼠小僧の事にて来る

○禁酒

○二十八日

○暑気甚シ。午前巖谷三二君来訪。鼠小僧の演出を頼みたるため也。  
読書

○午後俵藤丈夫君来訪。新国劇九月興行についての相談なり。他に慰め

やうもなければ、往年新派芝居逆境時代の話などして励ます。小説家某君及び某君のことを聞いて憤激を感じる。沢正生存時代には腰巾着になりて、見ぐるしきまでに同座の提灯持ちをなせる人々なり。その間に長谷川伸君といふ人、無力ながら俵藤君のためにいろく心配してくれるといふ。

この夜も禁酒。

○二十九日

午前読書

○松蔦子の懇請もだし難く午前十一時歌舞伎座に唐人お吉稽古見にく。帰途松竹事務所に廻はり井上君の脚本決定を大谷氏に告ぐ。双手をあげて賛成。この夜も禁酒。(実はナイシヨにてビール一本)

○三十日

○午前読書

○午後ふと思立ちて上野韻松亭なる鼠小僧の稽古を見にゆく。大谷社長と出会。井上正夫君あとを追ふて来る。山下支那料理翠松亭にて脚本江藤新平梗概を話す。彼人大よろこび。帰途神楽坂東雲に立寄りて大酔。

○三十一日

○流石に宿酔の気味あり。再三の電話ゆゑ正午近く歌舞伎座舞台稽古見

にゆく。第三幕を終りしところなり。帰途スキヤ河岸更科ニテソバを食す。

○午後四時頃新潮社中根駒十郎君来訪。西鶴全集のこと、並に江藤新平脚本のこと。

夜は読書。

○九月一日

○午前晴。午後曇りて蒸暑し。

○昼、例年のごとく玄米飯、スイトン、鮭の缶詰。

○終日読書。脚本材料採拾。中島四郎君来る。手賀沼のぶさん来る

○二日

○晴。あつし。終日読書、考案ほゞ成る。午後村松翁上京の電話あり。

○夜黒川一君、金をとゞけ来る。いつもながら同君の厚情酬ゆるところを知らず。

○和田君を村松翁へ挨拶にやる

○三日

○暑し。終日読書。

○築地劇場係の浅利といふ人（左団次君の姻戚）来る。村松翁へ挨拶のため歌舞伎座へ顔を出す今日返り初日也

○午後七時より上野韻松亭へ鼠小僧の稽古見にゆく。黒川君と同行、途

中京橋つた屋にて晚餐。はからず長谷川君（伸）淵田君に逢ふ。十二時頃帰宅。母、トミオなどカブキ座より帰りしところなり。

山口剛君より使あり、昨日帰京の由。

○四日

○暑し。読書。少しく頭痛を覚ゆ。

○正午俵藤君来訪。内情を聞くほど気の毒なり。わが心痛む。

○午後五時半、井上正夫君来る。鈴木氏亨君を誘合はせて本郷座にゆく。築地の芝居といふものを初めて見る。

○帰途小雨を避けて本郷通のバアにてビールを傾く。大谷社長と面会。

○五日

○六日

暑し。

夜、本郷座鼠小僧舞台稽古を見て、夜ふくるゆゑ二幕にて帰る。

七日

終日懊悩して一枚も書けず。本郷座初日。いね、おやそ伯母などをやる。村松翁を招待す。

雨。寒し

八日

十一月廿六日

頭重く不快。横沢君に送金して出京を促がす。永代蔵注記整理のためなり。この朝清水省三君倉皇として尋ね来り門前を掃きゐる老母に菓子折爛炉を托して去ると云ふ。例の疑獄事件にて召喚をうけたるにあらずや。

二十七日

朝横沢君来着。初対面なり。宿をキリシタン坂下に定む。

黒川一君来る。脚本江藤新平の出来をよるこびて、社長代理に来れるなり。

この日朝、米沢の伯母、東きたる。夜横沢君と西鶴輪講の打合せをなす。

〔頭書〕西鶴研究カード二種注文用紙水仙の七十五斤

二十八日

終日読書。午後四時より永代蔵の講義。一卷の三を半頃まで終る。午後七時半なり。この日魚河岸大誠にたのみ赤飯弁当をつくりて、家内一同と共に祝ふ。年来の志望たりし西鶴研究に助手をたのみて今日より編纂にかゝるために些か心祝をなすなり。前途は遠し、成否の程は知りたきも健康さへゆるさば、卒業の時はありと信じ得るなり。

二十九日

読書。夜横沢君と打合せする。伯母米沢へ帰る。

三十日

曇。微雨。午前婦人クラブに送るため旧稿の脚本訂正。これも世渡るためなり。

十二月二十日

古人みな六十にして易を読む

さとれりといふも悲しきこゝろ

冬の雨は見るにまさると今日知りぬ

梅の木膚の濡れたるよし



ま

牧野良三	3/3, 8/3
升沢ちう (仙台おちうおば)	7/31
松本幸四郎	3/7
松本賛吉	1/2, 7/31
松本要次郎	8/7
真山東	11/27
真山いね	8/10, 8/12, 9/7
真山摂子 (せつ子)	1/4, 8/2
真山 (森) とみを	3/3, 3/4, 9/3
真山ひで	3/4
真山美保 (みほ子)	1/4, 1/8, 7/28
真山零一	1/1, 1/4, 1/7, 7/28, 8/10
水守亀之助	1/15
水守こゆゑ (水守君母堂)	1/9
皆川淇園	8/10
峰田	8/3
村口書店	1/25
村松春水	7/31, 8/12, 8/13, 8/14, 9/2, 9/3, 9/7
守田勘弥	3/7

や

やそ (米沢の伯母)	8/1, 9/7, 11/27, 11/29
柳永二郎	8/7
山口剛	12/29, 1/8, 1/9, 1/16, 1/18, 1/25, 1/26, 9/3
山本	1/10
横沢憲治	8/9, 11/26, 11/27, 11/29
吉田松陰	7/31
吉野作造	3/4, 3/5, 8/27

わ

鷺尾雨工	12/29
和田勝一	12/30, 12/31, 1/2, 1/4, 1/10, 1/15, 1/20, 3/7, 8/13, 9/2
綿谷雪	1/9, 1/12, 1/16, 1/26

ちよ (ちよ女)	1/9, 3/5
ちよ (仙台ちよおば)	3/5
唐人お吉	7/28, 7/29, 8/10, 8/13, 8/24, 8/29
豊島正治	8/6

## な

仲木貞一	3/3
中島 (上州中島)	8/17
中島四郎	9/1
中根駒十郎	8/31
永見徳太郎	12/30
中村吉蔵	3/3
中村積徳堂	12/28
西沢一鳳 (一鳳軒)	7/29
額田六福	1/20
鼠小僧	8/27, 8/28, 8/30, 9/3, 9/6
能恵留	7/29
乃木希典	1/15, 3/7
のぶ (おのぶ)	3/7
のぶ (手賀沼のぶさん)	9/1
野呂瀬	1/17

## は

長谷川伸	8/28, 9/3
畠井	1/25
畑中蓼坡	1/11
英太郎	8/7
花柳章太郎	8/7
阪東寿三郎	8/19
菱川師宣	1/7
日比繁治郎	8/19
俵藤丈夫	12/31, 1/26, 7/29, 8/3, 8/16, 8/28, 9/4
福井野紅	12/29
藤井昇	8/7, 8/18
芋水画房	12/30, 12/31
二神文六	3/3
澗田	9/3

岡本かく（岡本靈華夫人） 1/16  
岡本靈華 1/16, 1/17  
翁久允 3/5  
小栗儀造 1/6  
尾崎久弥 12/30, 1/5, 3/4

## か

菊池寛 3/3, 8/3  
楠林書店 8/3  
国木田みどり 3/3  
黒川道祐（遠碧軒） 8/4  
黒川一 12/30, 1/19, 7/29, 8/1, 8/3, 8/5, 8/27, 9/2, 9/3, 11/27  
小林 8/2  
小森新次 8/6

## さ

桜井忠温 1/15  
指方 12/30, 12/31, 1/2, 1/26, 3/6  
佐藤 1/10  
佐藤紅緑 1/17  
佐藤鶴吉 12/29  
沢田正二郎（沢正） 1/8, 3/3, 3/4, 3/6, 3/7, 3/8, 7/29, 8/28  
塩沢亮 7/31, 8/1  
島中雄作 1/11  
清水省三 11/26  
松竹（松竹事務所・事務所） 7/28, 8/6, 8/9, 8/11, 8/12, 8/13, 8/25, 8/29  
白石慶三 1/13  
新潮社 8/31  
鈴木氏亨 12/29, 12/31, 1/8, 1/11, 1/25, 8/3, 9/4  
鈴木敏也 1/19

## た

高橋菊三郎 1/2, 1/6  
竹柴鷹二 7/30  
伊達宗重（伊達安芸） 1/16  
田中大蔵 8/10  
中央公論社 1/10, 1/11

## 人名索引

### 凡例

- ・配列は姓名の五十音順とした。姓あるいは名のいずれか一方のみしか判明しない人物についても、その読みに従って配列した。
- ・姓名の読みは推定のものも含む。
- ・歴史上の人物については、広く知られている呼称を項目に立てた。
- ・利用の便を考慮し、作品名に含まれる人名、出版社名や書店名なども採録した。
- ・姓や名の記載を伴わない普通名詞は、特定の人物・組織を指すと推定されても、一部の例外を除き立項・採録しないことを原則とした。
- ・日記の記事において索引項目とは異なる呼称が使用されている場合や、同姓あるいは同名の人物を区別する必要がある場合などは、補足の情報を（ ）に入れて示した。

人名	日記月日
あ	
浅倉寅雄	1/16, 1/20
浅利鶴雄	9/3
粟屋愛亮	8/6
伊志井寛	8/7
市川左団次	9/3
市川松蔦	8/29
伊藤	7/30
伊藤茂雄	1/2
伊藤伸子	3/4
井上宗助	8/9
井上正夫	8/11, 8/24, 8/25, 8/27, 8/29, 8/30, 9/4
井原西鶴	12/28, 12/29, 1/1, 1/2, 1/3, 1/4, 1/5, 1/7, 1/9, 1/10, 1/11, 1/12, 1/17, 1/19, 1/20, 1/26, 7/31, 8/9, 8/10, 8/31, 11/27, 11/28
巖谷三一	8/28
宇野四郎	3/7
梅本	1/3
江藤新平 (江藤南白)	8/26, 8/27, 8/30, 8/31, 11/27
穎原退蔵	7/31
大坂松竹	8/19
大谷竹次郎 (社長)	8/1, 8/3, 8/6, 8/7, 8/9, 8/10, 8/11, 8/25, 8/29, 8/30, 9/4, 11/27
大庭恭平	7/30